

東愛知カラーニュース

豊橋で防災フェア

東日本大震災に学ぶ「備え」

宮城の製造業者ら招き座談会

NPO法人東海リスクマネジメント研究会豊川市蔵子6、彦坂高司理事長主催の第7回「防災フェア」(東愛知新聞社など後援)が9日、豊橋商工会議所4階で始まった。東日本大震災で被災した宮城県内の製造業者らを招いた座談会や、緊急時に役立つ防災用品の展示会などを行った。10日まで。(安藤聡)



座談会で1年前の地震発生当時を振り返る
高橋さん(右から2人目) 豊橋商工会議所で

備蓄品確保や避難訓練の徹底訴え

中小企業経営者らはもとより、一般家庭でも被害を最小限にする対策のPRはじめ、被災後から復旧までの備えの重要性を呼びかけようと開催された。間もなく大震災から1年が経つこともあり、今回は宮城県大崎市で被災した電子部品組立工場社長の高橋一宏さんと、保険代理業社長の佐々木一元さんを招いて意見など聞いた。



災害時に役立つ製品を紹介するフェア＝同

幸司・豊橋設計社長がパネラーとなり、彦坂理事長の司会で活発に

意見交換した。その中で、高橋さんは緊急地震速報を挙げ「社内に設置した装置が地震の16秒前にアラウンスしたので、従業員は一斉に避難して全員無事だった」と有効性を指摘した。一方、佐々木さんは「発生時は仙台市内にいた。都市部ではビルの外壁が崩れ落ちるなどの被害があったので、屋外への避難は慎重に判断する必要がある」と注意を促した。2人ともBOP(事業継続計画)を作成し、日頃から従業員らと災害に備えているといい、来場した50人以上の会社経営者らに対しても、備蓄品の確保や避難訓練の徹底を訴えた。また、同フェアでは、県内外の企業14社と県、豊橋商工会議所、海洋研究開発機構、日本損害保険協会が、水電

池を利用した懐中電灯やイルミネーション装置、非常時に活躍するソーラー蓄電装置キットなどの災害関連用品を出展し、会場各所で来場者の注目を集めた。10日も午前10時から午後5時まで同所で行う。

座談会のテーマは「東日本大震災に何を学ぶか」。高橋さん、佐々木さんはじめ内山